

業されていた硫黄鉱山が被災し、70名以上の従業者が死に生存者は3名に過ぎなかったという。大変な災害だが、明治21年の磐梯山の爆発とその災害の規模にかくれて余り語る人がいないのかも知れない。箱根の早川が芦の湖の湖尻から発するのと同じに、「沼の平」火口湖の沼尻から発していた火口瀬の沼尻川から、沼尻高原の名前が由来したのであろう。上記の廃屋は当時の鉱山小屋の筈なのだが、この火山爆発を説明する立札も何もない。その上、硫黄臭のする火口底を、何の注意を受けることもなく歩けるのには、未だに不思議な思いが残っている。

(1980年1月15日)

浅井先生のこと

井内 昇

浅井先生が定年退官される。日頃、若々しい、元気なお姿に接していると実感が湧かないが、その日は間違いなくやって来る。先生が去られた教室を思うと寂しい。

先生の学問的な業績については他に語るべき適任者が多いから、この欄を借りて先生の身近な印象を幾つか綴ってみたい。

先生におつき合い頂いた期間は5年に満たないが、先生のお名前を認識したのも確か今から7～8年前のことであった。当時、勤め先の雑誌書庫の中で調べものをしていた時、ふと手にとった雑誌の中に、先生の「実験地理学(?)の提唱」の記事が載っていた。その頃、役人生活を続けるか、或いは将来大学に転ずるかを考え始めていたこともあって読んでみたのだが、「地理学研究とは、地味で根気の要る仕事だ」ということを教える、怠け者にとってはいささか士気沮丧させられる厳しい内容だったことを覚えている。先生のこの実験、実証を重んずる研究態度には、その後ゼミや論文発表会などでしばしば接することができたが、このことが私にとって研究上の大きな戒めとなっていることを今あらためて感じている。その頃から私も春、秋の大会などに顔を出すようになり、知らないうちに先生の容姿に接していたらしく、50年夏に初めて教室で先生に紹介された時、「あゝこの方が浅井先生だったのか」と、名前とお顔が初めて一致した次第である。

それから4年余、偶然先生の隣の研究室に住み着いたこともあって、先生との接触の機会もふえたように思う。学問以外の部分での先生の印象といえば(誰でも同じと思うのだが)、その心身の若さ、特に旺盛な好奇心であり、その具体的な現れの一つが機械好き、工作好きの面であろう。先生の研究室を中心に、観測設備から居住環境施設に至るまで、先生手づくりの作品は数知れず、しかもそのどれもが素人とは思えぬ見事な出来ばえを示している。時々、先生の研究室から電気鋸の音が聞えてくると、「次の作品は一体何であるか?」と興味深々その完成を待ったものだった。機械好きの面が最も発揮されたのは写真に関してであろう。教室の大型写真複写機を動かせるのは先生だけであつたし、日常的なカメラ操作でも玄人の域に達しておられた。特にサウンド付8mmと立体写真にご熱心で、立体写真は市販の部品では飽き足らず、工作知識を駆使して業者に特注する、という癡り様であつた。一般に機械好き、といわれる人達は、写真、ステレオ、自動車の3つをこなす様だが、この点、不思議

議なことに先生は自動車運転はとうとうなさらなかった。或いは、「運転などは車夫馬丁のすること」とお考えだったのかも知れない。ステレオのことは存じあげないが、教室へ来て間もなく、或る土曜の午後、隣の研究室から壁を透して軽快なポピュラーミュージックが流れてきた。どう考えても先生の印象とポピュラー音楽とは両立しなかったから、多分補佐員のI君であろう、と勝手に決めたのだが、この主は何と先生であることが知れた。うかがうと、大変お好きだ、とのこと。この分ではステレオに関してもマニアであるに違いない。

ともあれ、旺盛な好奇心、興味、関心は学問にとっても必須の要件であり、ご退官後もご研究が發展するであろうことを信じて疑わない。不肖な後輩であるけれども、今後も先生の変らぬご指導を賜りたいと願っている。

浅井先生と予稿集

内藤博夫

昭和45年4月から47年3月まで浅井先生は日本地理学会常任委員になられ、集会委員長をつとめられた。私もその際、集会委員を委しょくされ、浅井先生を補佐することになった。集会委員会の主な仕事は年に2回開かれる大会と、ほぼ毎月開かれる例会を準備することである。浅井先生はこの仕事に意欲的にとり組まれた。浅井先生がリーダー・シップをとって行われた改革のなかで、もっとも大きいものと考えられるのは大会発表に関する予稿集の刊行である。例会発表に関してはその要旨が機関誌の地理学評論に掲載されるので会員は事前に発表内容の概略を知ることができる。しかし大会発表に関してはそのような便宜がなく、タイプ印刷の要旨集が大会当日または事前に会員に配布されるにすぎなかった。地理学評論とは別の発表要旨集になると保管の点で不便であるだけでなく、文献としての価値が事実上ゼロに等しくなってしまうという欠点があった。浅井先生は気象学会その他の例を参考にしながら、要旨原稿をそのまま写真製版し、印刷・製本してまとめた文献に仕立てる予稿集の必要性を力説され、これが学会を動かすことになって昭和46年度秋季大会（鹿児島大学にて開催）より刊行をみることになった。

予稿集を刊行する際に不安な点が一つあった。それは、発表時より2カ月余り前にかなりまとまった原稿を提出しなければならないために、発表数が減るのではないかということである。普通、発表要旨として要求される分量は1200字程度が多いが、予稿集の場合は約4500字分が要求されることからいっても、この不安は根拠のあるものだったと思う。それに、学会発表をおこなったことのある人なら大なり小なり経験することであるが、研究活動は発表直前まで続けられているものであり、発表申込時と発表時では内容が多少変ることも生じるので、2カ月前に原稿の提出を求められることが発表者にとってかなりの負担になることは十分予想できた。しかし実際にフタをあけてみると、発表件数は減るどころか、逆に年々増える傾向にある。たとえば予稿集第2号（1972年度春季）の発表件数は123であったのに対し、予稿集第16号（1979年春季）では136件に達した。このような結果をもたらした理由としては次のことが考えられる。第1に学会会員数が増えたこと、第2に予稿集が文